

民俗文化

第23号 2011-6 近畿大学民俗学研究所



近畿大学
KINKI UNIVERSITY

民俗文化

第二十三号



①西郷の港

(隠岐の島町西郷、1993年、渡辺撮影)
江戸時代、北前船の寄港地として栄えた。

②隠岐自然館の北前船模型

(隠岐の島町西郷、2010年9月、胡桃沢撮影)



③積み出しを待つ木材

(隠岐の島町西郷、2010年11月、戸井田撮影)

西郷港まで運ばれ、積み出しを待っている木材で、手前に製材、奥に丸太材が見える。輸入木材の増加による木材価格の低迷で隠岐の林業は苦戦を強いられているが、隠岐、とりわけ島後は林業の盛んな土地である。

④島根県立隠岐水産高等学校

(隠岐の島町西郷、2010年11月、戸井田撮影)

沿革は明治40(1907)年創設の町村組合立隠岐商船学校で、現在は海洋システム科と海洋生産科の2学科、および専攻科からなる。漁業の島、隠岐を象徴する伝統校である。昭和5年制定の校歌は、「歴史に古く其の名も高き、潮路逢けき隠岐の島が根……、名に負う荒波日本海の、猛き自然を心の守り……」と歌い上げている。





⑤玉若酢命神社・御霊会

(隠岐の島町下西、1993年6月、渡辺撮影)

神幸祭。背後の杉は樹齢千年の八百杉。古式を再現して神輿渡御。



⑥玉若酢命神社・御霊会

(隠岐の島町下西、1993年6月、渡辺撮影)

最大の呼び物「馬入れ」。神社拝殿やお旅所へ馬が若者とともに駆け込む。



⑦ 壇鏡神社の牛突き（隠岐の島町都万、1972年9月、渡辺撮影）

隠岐の牛突きは、後鳥羽上皇が隠岐に配流になった際、上皇をなぐさめるためにはじまったという伝承がある。



⑧ 隠岐古典相撲

（隠岐の島町郡・水若許命神社、2010年11月、藤井撮影）

隠岐では、神社の遷宮や慶事などに古典相撲が行われる。約300年の歴史があるといわれている。

⑨ 山の神

（隠岐の島町郡、1991年9月、胡桃沢撮影）





⑩島後の民家

(隠岐の島町、2010年11月、藤井撮影)

旧西郷町都万目にあった日野家の母屋。江戸時代末期に建てられたと考えられる。現在は隠岐郷土館敷地内に移築されている。島後の大型農家の特徴である「4間取り+ナカ工」が見られる貴重な建築である。ナカ工とは、炊事と食事をする開放的な空間であったが、大正から昭和初期に、食事と団らんの場所へと変化した。屋根は茅葺きで、入母屋作りとなっている。

⑪防風柵

(隠岐の島町油井、2010年11月、藤井撮影)



⑫小魚を干す

(隠岐の島町西郷、1991年9月、胡桃沢撮影)

⑬都万釜屋の舟小屋群

(隠岐の島町都万、2010年8月、大脇撮影)

玉石が多い海岸に21棟の舟小屋がずらりと並んで壮観である。現在のものは、昭和62(1987)年に昔からの小屋が農道建設によって立ち退くことになり、海寄りに約5m位置をずらして建てられたものである。やや整然としすぎたきらいはあるものの、柱に自然木を使い、屋根も伝統的な石置き杉皮葺きとするなど景観に配慮して再建されており、隠岐の名所のひとつとなっている。





⑭郡の墓地（隠岐の島町郡、1991年9月、胡桃沢撮影）

墓地に魔よけの鎌や死出の旅路のための履物が置かれている。



⑮白島

（隠岐の島町、2010年11月、藤井撮影）

隠岐・島後の最北端。西村では漁の神を祀っている。ここには、オオミズナギドリ
の繁殖地がある。地中に巣を作るため、地
元ではアナドリという。地元では、この鳥
を捕獲して食用とすることもあった。ま
た、白島の松島では、アシカを捕獲するこ
ともあった。



⑯隠岐騒動勃発地の碑

（隠岐の島町西郷、2010年9月、胡桃沢撮影）

⑰卯敷の舟小屋群

(隠岐の島町卯敷、1965年、宮本常一撮影)



⑱卯敷の舟小屋群 (隠岐の島町卯敷、1968年、宮本常一撮影)

日本海側は干満差が少ないこともあって、各地に舟小屋が発達した。宮本常一は何回か隠岐を訪れているが、この2枚は昭和40年(写真⑰)と43年(写真⑱)にほぼ同じ位置から撮影された卯敷の貴重な舟小屋群の写真である。定点観測ともいえるこの2枚の写真と、渡辺良正による昭和47年撮影の雪景色の写真(写真⑲)を注意深く観察することで、漁業と林業によって支えられたこの村のくらしの変遷がみごとにみえる。





⑱卯敷の民家（隠岐の島町卯敷、1972年、渡辺撮影）

⑳布施の集落（隠岐の島町布施、1972年、渡辺撮影）

昭和47年に撮影された貴重な石置き杉皮葺き民家の写真。『布施村史（昭和61年刊）』所収の地図と写真背景の墓地などの位置関係を比較すると、布施の港の北外れに近い海沿いの小さな家であることがわかる。重要文化財に指定されている佐々木家住宅を除くと、今はもうこうした杉皮葺きの家を見ることはできない。





⑳後鳥羽上皇御火葬塚
(海士町、2010年11月、戸井田撮影)

承久3(1221)年、後鳥羽上皇は、執権北条義時を追討すべく承久の乱を起こしたが完敗し、同年、中ノ島に配流された。以後、島をお出になることのないままに、延応元(1239)年、配所にて崩御された。中世屈指の歌人として知られ、日々のお慰みに数多くの歌を作られた。「われこそは新島守よ隠岐の海の荒き波風心して吹け」の歌がある。

㉑崎集落の景観
(海士町崎、2010年11月、戸井田撮影)

崎は坂ばかりの集落で、ほとんど平坦地がなく、イカ漁と牧畑で生計を立てた旧村である。村の南端、木路ヶ崎と対岸の知夫里島との間の水道はイカの通り道であり、イカの大群は西ノ島の由良が浜めがけて回遊し、由良が浜は「イカ寄せの浜」といわれた。



㉒清水寺天川の水
(海士町保々見、2010年11月、戸井田撮影)

保々見集落の外れにある湧き水で、環境省指定の「日本名水百選」の一つである。行基が発見したといわれ、以後、どんなに日照りが続いても枯れたことがないという。このエピソードは中ノ島が水に恵まれた島であることを意味しており、同じ島前の西ノ島・知夫里島とはやや性格を異にしている。

㉓宇受賀の舟小屋
(海士町、2010年8月、大脇撮影)

宇受賀命神社から北に入ると、深く切れ込んだ小さな港がある。西岸には連棟式の舟小屋があり、南岸には12棟の舟小屋が並ぶ。屋根はいずれも鉄板葺き。連棟式のほうは8間に分けられており木造の古いカンコを2艙ずつ収容するが、最近はあまり利用されていない様子だった。





②⑤ シャーラ船

(海士町崎、2010年8月、大脇撮影)

隠岐では、盆の精霊船のことをシャーラ船と呼ぶ。柳田国男が主導した海村調査では、島後・油井のシャーラ船の写真が大島正隆の「海村手帖」(昭和13年)に載っている。地域によって大きさもさまざまである。渡辺の写真(写真②⑦)にあるように、西ノ島町のは、麦わらで船体を作り、帆柱を立てた大きな船となっている。

②⑥ ミソハギ

(海士町崎、2010年8月、大脇撮影)

盆のころに咲く水辺の多年草。各地で盆花として用いられてきた。全国的に少なくなっており、島前でも絶滅したと思われていたが、崎地区の水田跡で発見され、保護されている。



②⑦ シャーラ船送り

(西ノ島町浦郷、1993年8月、渡辺撮影)

②⑧ シャーラ船送り

(西ノ島町浦郷、1993年8月、渡辺撮影)





⑳焼火神社（西ノ島町、2010年10月、藤井撮影）

焼火山（海拔452m）の中腹に鎮座する。日本海を航行する人々から海上安全の神と崇められてきた。大晦日の夜に、海上から3つの光が上がり、大殿背後の岩屋に入ったという縁起がある。隠岐汽船のシンボルマークに3つの丸が使われているのは、この神社の縁起に由来しているという。昭和になってからも、隠岐の人々は、大晦日に神社に籠り、神火を見ようとする習俗があった。旧暦1月5日から、集落ごとに神社へ参る「初参り」という習俗もあり、現在でも行われている。社殿は享保17（1732）年に改築されたものである。

㉑島前湾の水道（2010年11月、戸井田撮影）

西ノ島の焼火山より南を望んだもので、右が知夫里島、左端に中ノ島の木路ヶ崎の先端が少しだけ見える。この水道をイカをはじめとする豊富な魚類が通過し、付近は好漁場となった。かつて西回り航路の帆船も、焼火山を目印として航行し、やはりこの水道を通った。





③① 野シバを食む放牧馬

(西ノ島町、2010年11月、戸井田撮影)

西ノ島は隠岐で最も馬の放牧が盛んな島である。牛馬がのんびりと草を食むことのできる山頂付近の平坦地を「トコ」と呼ぶ。長時間とどまるので糞が多くたまり、肥沃な牧畑となった。ただし、海から強風が吹きつけるので、作付けるには場所選びが重要だった。

③② イカ寄せ浜

(西ノ島町浦郷、2010年10月、藤井撮影)

由良比女神社前の入り江には、毎年、11月下旬から翌年の2月中旬ごろにかけて、スルメイカの大群が押し寄せる。イカが来るのは、波が穏やかな夜や、月の出入りのころなどといわれる。イカはシクシク泣くという。浦郷の人々は、海岸に番小屋を建て、イカを拾った。浦郷区が管理をし、くじびきで場所を決めていた。戦前にはこの海岸に数十の番小屋が建ち並んだという。男も女も出かけた。遠浅の海中に入り、拾うようにイカを籠に入れた。多いときには大八車で曳くぐらい捕れたという。イカ拾いはかなりの収入になった。



③③ イカ漁

(西ノ島町浦郷、2010年10月、藤井撮影)

現在では、隠岐全体でイカ漁が盛んである。イカ釣りでは捕るのはシロイカ。

③④ 西ノ島町の船引運河

(西ノ島町、2010年8月、大脇撮影)

西ノ島のほぼ中央に大きく入り込む美田湾から日本海の外海を結ぶ船引運河は、大正4(1915)年に長さ340m、幅10m(現在は12mに拡幅)の規模で開削された。かつては、この地峡を船を引いて越えたことから、船越という地名が生まれた。こうした地形なので、日本海で起きた天保4(1833)年や昭和58(1983)年の地震では、高さ3mの津波が押し寄せ、船越や小向で大きな被害があった。





③⑤一宮神社から南を望む（知夫町、2010年11月、戸井田撮影）

鳥居の向こうに見える知夫漁港は、かつては本土からの玄関港であったため、島前の主港として大いに栄えた。しかし、現在は島前連絡の都合上、北側の来居港が島の玄関口となり、本土からのフェリーもそちらを使う。なお、神社の「一宮」は通称で、正式名は天佐志比古神社という。



③⑥牧畑のアイガキ

（知夫町、2010年11月、戸井田撮影）

アイガキは牧畑と牧畑の間に築いた牧柵である。ここ赤ハゲ山の山頂付近は、かつて牧畑として使われたが、現在は公共牧野として牛馬が放牧され、アイガキが多く残る。牧畑では、アイガキのあちら側とこちら側で耕作地を輪転させ、定期的に牛馬を移しては地力を回復させた。

③⑦牛競り

（知夫町、2010年11月3日、戸井田撮影）

島前では、3月・7月・11月の各1日ずつ、西ノ島・中ノ島・知夫里島を巡回して牛の競りが行われる。この日、11月3日は知夫里島の競り日で、生後4か月から1歳くらいまでの肉牛が競りにかけられた。これらの牛は兵庫県や三重県などの牧場でさらに肥育され、やがて「神戸牛」「松阪牛」として出荷される。





⑳美保神社・青柴垣神事（松江市美保関町、1975年4月、渡辺撮影）

㉑美保神社・青柴垣神事（松江市美保関町、1975年4月、渡辺撮影）

4月7日を中心に13日間行われる。記紀神話の国譲り神話を儀礼化した神事。コトシロヌシが、国譲りのあと、海中に青柴垣をめぐらして隠れた神話を再現している。





④美保神社・諸手船神事（松江市美保関町、1973年12月、渡辺撮影）

④美保神社・諸手船神事（松江市美保関町、1995年12月、渡辺撮影）

12月3日に行われる。これも、国譲り神話を再現した神事である。諸手船に乗ってきたオオナムチの使いと、祭神コトシロヌシが話し合いをした神話を再現しているという。





④②出雲大社・神在祭（出雲市、1976年旧暦10月、渡辺撮影）

旧暦10月10日から17日に行われる。10日に全国から集まった神々を迎え、17日まで神々に対する祭典が行われる。10日の夜、大社西側の稲佐浜から神々を迎える際、ウミヘビを龍蛇様として出雲大社へと迎える。



④③出雲大社の吉兆と番内さん
（出雲市、1990年1月、渡辺撮影）

正月の神である歳徳神を祀る祭り。写真は「吉兆さん」。行列の先頭は、鬼の面をかぶり、さらびやかな衣装を着た「番内さん」が歩き、「悪魔払い、悪魔払い」と叫びながら町内を回る。



④④佐太神社に捧げられたホンダワラ（松江市鹿島町、2010年10月、藤井撮影）

島根半島の家々では、忌明けのとき浦へ行き、竹筒に海水を汲んで、ホンダワラを採って、口、手をすすいで、神社へ参る。参ったときに、神社へ竹筒とホンダワラを納める。一部は持って帰って、家の祓いをする。これが終わって、寺で四十九日の法要をする。四十九日が終わると、新仏と先祖を一緒にする。家に不幸があると、仏壇を閉めている。地元の氏神にも参る。氏神にも拝殿の格子に、ホンダワラを引っ掛ける。



④⑤佐太神社の龍蛇様のお札

（松江市鹿島町、2010年10月、藤井撮影）

佐太神社には、明治まではウミヘビを捕る専門の人がいた。龍蛇様として祀る。現在では、島根半島一帯の漁民がたまたま捕れると持つてくる。11月ごろ、イカ漁の時期に集魚灯に集まってくるという。神として祀るのは1つ。神社では龍蛇様のお札を発行する。このお札は、神在祭のときに、買って帰る人が多い。厄よけ、火災よけとして、玄関や台所に貼っている。



④⑥ホーランエンヤ

（松江市、1985年5月、渡辺撮影）



④7 築地松

(斐川町、2010年10月、藤井撮影)

出雲平野の民家では、北側と西側を取り囲むように、黒松を植えて屋敷林を作っている。一定の高さできれいに刈り込まれている場合が多い。季節風を防ぐと同時に、土地を安定化させる目的もあるという。出雲ではこうした屋敷林を築地松と呼んでいる。

④8 出雲の民家と和紙作り

(松江市八雲村、1969年、渡辺撮影)



④9 境水道の渡し舟

(鳥取県境港市、2006年2月、藤井撮影)



⑤0 美保関から大山を望む

(松江市美保関町、2006年12月、藤井撮影)



⑤ 二十世紀梨の古木

(鳥取県湯梨浜町、2010年5月、戸井田撮影)

明治21(1888)年、千葉県で突然変異によって生まれた二十世紀梨は、明治37年から鳥取県内各地に移植された。この木は草創期に植えられた1本で、樹齢は優に100年を越す。枝振りには東西約14メートル、南北約17メートルに及び、日本最大級のものである。

⑤② 倭文神社の例祭

(鳥取県湯梨浜町、2010年5月、戸井田撮影)

倭文神社は伯耆国一ノ宮で、広く安産の神として信仰される。言い伝えによると、大国主命の娘、下照姫命が出雲からこの地においでになり、ここに居を定められた。毎年5月1日に行われる例祭では、地区ごとに御輿(神輿)が出され、境内に縁日がならぶ。社名はこの地方の主産業が倭文の織物であったことに由来する。



⑤③ 御旅所祭

(鳥取県湯梨浜町、2010年5月、戸井田撮影)

御旅所は、巡航の途中、御輿(神輿)が休憩または宿泊する場所をいい、御旅所に着くと御旅所祭が執り行われる。倭文神社の例祭では、稚児たちも御輿にお参りをし、この行事が次世代へと受け継がれていく。

⑤④ 倭文神社の餅撒き

(鳥取県湯梨浜町、2010年5月、戸井田撮影)

本殿から撒かれる餅に手を伸ばす善男善女。餅撒きは本来、上棟式(建前)で災いを払うための神事で、建物のお披露目の意味も込められる。今回は新築された社務所の奉告祭にともなうもの。





⑤宇野地蔵ダキ

(鳥取県湯梨浜町、2010年5月、戸井田撮影)

旧羽合町の宇野地区は、海岸に近い集落で、出雲を発った下照姫命はまずこの付近に上陸された。ダキ(タキ)は滝すなわち湧泉のことで、これは環境省の「平成の名水百選」に選定されている。

⑥若桜神社の本殿

(鳥取県若桜町、2010年5月、戸井田撮影)

若桜神社は平安時代初頭、若桜鬼ヶ城の初代城主矢部氏の創建とされる。広い境内にはシラカシを中心にヒノキやモミの原生林によって鎮守の森が形成され、「若桜神社社叢」として鳥取県の天然記念物に指定されている。



⑦若桜市街の家並み

(鳥取県若桜町、2010年5月、戸井田撮影)

兵庫県境の水ノ山の麓に広がる宿場町若桜は、豪雪地帯であることから、北陸地方に多い雁木が見られる。当地ではこれを「カリヤ」と呼び、これが続く中央通りを「カリヤ通り」と呼んでいる。軒先に幅1メートル余りのひさしがついた私道で、雪や雨の日でも傘をささずに通行ができた。



⑧こいのぼり流し

(鳥取県用瀬町、2010年5月、戸井田撮影)

「流し雛の里」として知られる用瀬では、端午の節供には幟の鯉ではなく、川のなかに鯉を泳がす「こいのぼり流し」が見られる。写真は鯉が雛人形の乗った船に曳かれ、清流のなかを泳ぐタイプのもの。





⑤9 早瀬を泳ぐ鯉たち

(鳥取県用瀬町、2010年5月、戸井田撮影)

集落内を流れる瀬戸川は、所々で早瀬をなし、そのなかを懸命に泳ぐ鯉たちもいる。

⑥0 百手神事

(鳥取市気高町、1996年4月、渡辺撮影)



⑥1 宇部神社の春祭り

(鳥取市国府町、1971年4月、渡辺撮影)

神輿の御供「馬」。

⑥2 賀露神社の春祭り

(鳥取市賀露町、1993年4月、渡辺撮影)

青年たちが中心の幟武者。太鼓の音に歩調を合わせ、青竹で地面を叩きながら船着場へ向かう幟武者の若者たち。



②	①
④	③
⑥	⑤

表紙

- ①玉若酢命神社・御霊会で神前に捧げられた海藻
(隠岐の島町下西、1988年6月、渡辺撮影)
- ②国分寺・蓮華会
(隠岐の島町池田、1993年4月、渡辺撮影)
- ③ハデバ(稲掛け)
(隠岐の島町池田、1991年9月、胡桃沢撮影)
- ④石置き杉皮葺きの民家・佐々木家
(隠岐の島町釜、2010年8月、大脇撮影)
- ⑤舟小屋
(隠岐の島町大久、2010年8月、大脇撮影)
- ⑥国賀海岸摩天崖の馬
(西ノ島町、2010年10月、藤井撮影)



表紙・口絵写真 隠岐・山陰沿岸の民俗……………

大脇 潔
胡桃沢 勘司
戸井田 克己
藤井 弘章
渡辺 良正

目次

隠岐・山陰沿岸の民俗

隠岐・出雲麓紀行 — 杉皮葺きと左棧瓦・石州瓦 — ……

大脇 潔 1

近世の隠岐島海運 ……

胡桃沢 勘司 81

隠岐の自然と生業 — 牧畑のその後を中心に — ……

戸井田 克己 109

隠岐・山陰沿岸のウミガメの民俗 ……

藤井 弘章 173

島根県の神楽衣裳 — 資料的に整理するための取り組み …………… 浅沼政誌 219

鳥取の初午行事 — 鳥取市上味野地区を中心に …………… 原島知子 231

聞き書き 隠岐・竹島のアシカ猟 …………… 藤井弘章 245

中国山東省黄県人の商業慣習 …………… 蔣 惠 民 271
上田貴子(翻訳)

書評と紹介

岡恵介著『視えざる森の暮らし—北上山地・村の民俗生態史—』 …………… 戸井田 克己 291

野本寛一著『地霊の復権 自然と結ぶ民俗を探る』 …………… 藤井弘章 299

付 録

民俗学研究所第二三回公開講演会 幕制研究の課題(要旨) …………… 岩田重則 309

執筆者紹介 …………… 313

隱岐・山陰沿岸の民俗

書評と紹介

執筆 者 紹 介 — 生年・出身地・現職・著作 —

大脇潔（おおわき きよし）一九四七年、愛知県生まれ。

近畿大学文学部教授・同民俗学研究所所長。「みちの

く蕨紀行—カワラ前線北上スレドモ—」（『民俗文化』

第十八号、二〇〇六年）、「松前蕨紀行—北の蕨文化の

発見—」（『民俗文化』第十九号、二〇〇七年）、「対馬

蕨紀行—石屋根と「南北に市糶」した瓦—」（『民俗文

化』第二十号、二〇〇八年）ほか。

戸井田克己（といだ かつき）一九六〇年、東京都生

まれ。近畿大学総合社会学部教授・同民俗学研究所所

員。『武蔵村山市史 民俗編』（共編、ぎょうせい、

二〇〇〇年）、『日本の内なる国際化』（古今書院、

二〇〇五年）、『近畿を知る旅』（分担執筆、ナカニシヤ

出版、二〇一〇年）、『高等学校新地理A』・『新詳地理

B』（共著、帝国書院、二〇一〇年）ほか。

胡桃沢勘司（くるみさわ かんじ）一九五二年、長野県

生まれ。近畿大学文学部教授・同民俗学研究所所

員。『西日本庶民交易史の研究』（文献出版、二〇〇〇

年）、『牛方・ボッカと海産物移入』（岩田書院、

二〇〇八年）、「近世の道之島海運」（『民俗文化』第

二十二号、二〇一〇年）ほか。

藤井弘章（ふじい ひろあき）一九六九年、和歌山県生

まれ。近畿大学文学部准教授、同民俗学研究所所

員。『熊野川町史 通史編』（共著、和歌山県新宮市、

二〇〇八年）、『丹生都比売神社史』（共著、丹生都比売

神社、二〇〇九年）、『人と動物の日本史』四（共著、

中村生雄・三浦佑之編、吉川弘文館、二〇〇九年）ほ

か。

蔣惠民（しょう けいみん）一九五四年、中国山東省生まれ。元中国山東省竜口市博物館館長、副研究員。竜口市民間文芸家協会主席、烟台市民間文芸家協会副主席を歴任。二〇〇五年第一線を退く。蔣惠民『黄城丁氏家族』（山東大学出版社、二〇〇四年）蔣惠民編『丁氏故宅研究文集』（華文出版社、二〇〇五年）、「老膠東人的生意経『中国甲午戦争博物館館刊』（二〇〇六年）ほか。

上田貴子（うえだ たかこ）一九六九年、兵庫県生まれ。近畿大学文学部准教授。「奉天―権力性商人と糧栈」（安富歩・深尾葉子編『満洲―の成立』名古屋大学出版会、二〇〇九年）、「東北アジアにおける中国人移民の変遷：1860-1945」（蘭信三編『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版、二〇〇八年）、「山東幫於東北的情况」（蔣惠民編『丁氏故宅研究文集』華文出版社、二〇〇五年）ほか。

岩田重則（いわた しげのり）一九六一年、静岡県生まれ。東京学芸大学教授。『戦死者靈魂のゆくえ』（吉川弘文館、二〇〇三年）、『墓の民俗学』（吉川弘文館、二〇〇三年）、『お墓―の誕生―死者祭祀の民俗誌』（岩波書店、二〇〇六年）、『へいのち』をめぐる近代史―墮胎から人工妊娠中絶へ―（吉川弘文館、二〇〇九年）ほか。

浅沼政誌（あさぬま まさし）一九六〇年、島根県生まれ。島根県立古代出雲歴史博物館交流普及グループ課長。『金屋子神信仰の基礎的研究』（共著、岩田書院、二〇〇四年）、『出雲藍板締め の復元研究』（共著、島根県教育庁古代文化センター、二〇〇八年）、「指定管理者制度「島根方式」による博物館運営」（『博物館研究』通巻五〇八号、日本博物館協会、二〇一〇年）ほか。

原島知子（はらしま　ともこ）一九七五年、島根県生まれ。鳥取県教育委員会事務局文化財課文化財主事。「愛宕信仰の地域的展開…宮城県白石市周辺を中心に」（佛教大学アジア宗教文化情報研究所『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要05』二〇〇六年）「鳥取の愛宕信仰」（山陰民俗学会『山陰民俗研究』一三、二〇〇八年）、「地域社会における子ども組行事継承の諸問題　鳥取市気高町酒津のトンドウ」（鳥取県公文書館県史編さん室『子どもと地域社会―鳥取の民俗再発見』二〇一〇年）ほか。

渡辺良正（わたなべ　よしまさ）一九三三年、福岡県生まれ。毎日新聞東京本社出版写真部（一九六四―六六年）勤務後フリーとなり、日本国内の祭り、神事芸能、民俗芸能の取材に専念。現在、日本写真家協会会員、民俗芸能学会評議員。主たる写真集に、『椎葉神楽』（平河出版社、一九九六年）、『沖繩先島の世界』（木耳社、一九七二年）、『日本の祭り　山車と屋台』（サンケイ新聞社、一九八〇年）、など。

民 俗 文 化 第 23 号

平成 23 年 6 月 30 日印刷

平成 23 年 6 月 30 日発行

編集・発行者 近畿大学民俗学研究所

〒577-8502

東大阪市小若江3丁目4番1号

電 話 06-6721-2332

印 刷 所 近畿大学 管理部 用度課
